



『大集経』に見られる? 虚風? 仙人の伝説

著者	小林 久泰
雑誌名	人間文化研究所年報
号	29
ページ	1-11
発行年	2018-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000961/

『大集経』に見られる^{かるしった}佉盧虱吒仙人の伝説

小林久泰

A Sage Named Kharuṣṭa Found in the *Mahāsaṃṃipātasūtra*

Hisayasu KOBAYASHI

1. はじめに

親鸞の著作『顕浄土真実教行証文類』の「化身土卷末」は、冒頭の御自釈の一文を除き、すべて他の経典や論書からの引用で構成されているが、それらの引用群の中でも、『大方等大集経』からの引用が大部分を占めている。親鸞が引用しているこれらの『大集経』の引用文は、特に日月・星宿などの役割を扱ったものがほとんどであり、親鸞の宇宙観を知るための資料として極めて重要なものである*註1。

ところで、上記『大集経』からの親鸞による引用文の中に、宇宙の様々な星々や暦を配置した仙人として「佉盧虱吒^{かるしった}」なる人物が登場する。彼は、カローシュティー文字の考案者としても有名な人物である。この人物については、「カローシュティー」という文字の名前の語源も含め、研究者たちの間で、一世紀以上に渡る長い議論が行われてきた。本稿は、その議論の概要を整理するとともに、『大集経』の中で、彼がいかなる人物として扱われているのかを今一度、明確にすることを目的とする。

2. 「佉盧虱吒」という名称

「佉盧虱吒」という名称は、漢訳経典の中では、『大集経』のように仙人の名前を示す場合もあるが、文字の名前、すなわち、カローシュティー文字を示すものとして用いられることも多い。6世紀初頭に編纂されたとされる中国の『出三蔵記集』によれば、この文字は字体考案者の名前に因んでそのように呼ばれるようになったと記載されている。

『出三蔵記集』（大正2145. 55. 4b5-8）：

昔造書之主凡有三人。長名曰梵。其書右行。次曰佉樓。其書左行。少者蒼頡。其書下行。梵及佉樓居于天竺。黃史蒼頡在於中夏*註2。

「昔より字体考案者におよそ三人がいる。[その三人のうちの] 年長を名付けて、「梵」と言う。その書（ブラフミー文字）は右に向かって進む。次を「佉樓^{かろう}」と言う。その書（カローシュティー文字）は左に向かって進む。年少は「蒼頡^{そうけつ}」であり、その書（漢字）は下に向かって進む。梵および佉樓はインドに居り、黃史の蒼頡は中夏に存在した。」

現在、カローシュティー文字は、kharoṣṭhī というかたちで表記されるのが一般的となっている。しかし仏教文献やジャイナ教文献の中に散見される文字の種類^の列挙などを見てみると、kharoṣṭī, khaloṣṭī, karottī, kharostī, kharāstrī, kharoṭṭhī, kharoṭṭhiyā などというように様々な異なる表記でカローシュティー文字が記録されていることが分かる*註3。つまり、このことは、「佉盧虱吒」の元となるサンスクリット原語がインドにおいても一定ではなかったことを意味する。そのため、19世紀後半から、一世紀以上にも渡り、ヨーロッパを中心とする東洋学者たちは、「カローシュティー」という名称について頭を悩ませることとなった。

「佉盧虱吒」のサンスクリット語としてまず想定され得るのは、kharoṣṭha と kharoṣṭra の二つであろう。前者の解釈に従えば、「佉盧虱吒」という言葉は「ロバ」(khara) と「唇」(oṣṭha) の複合語で「ロバの唇を持つ者」を意味すると考えられる。そしてそれは「驢唇」という漢訳が残されている事実とも符合する。一方、後者の解釈に従えば、「佉盧虱吒」という言葉は「ロバ」(khara) と「ラクダ」(uṣṭra) の複合語で、「ロバとラクダ」を意味すると理解される。この語形もまた、サンスクリット文献に頻繁に用例を確認することができるものである。しかしなぜ、この字体、もしくは字体考案者が「ロバとラクダ」と呼ばれるのか、判然としない。

なお、「佉盧虱吒」という人物の原語を今に残しているサンスクリット文献が全く存在しないわけではない。ヘルンレ氏 (Hoernle 1916: 121-125) に未同定のサンスクリット断片として報告されている Hoernle MS., No. 143a, SB. 2 (Plate XX, No. 3, Obvere.) は、『大集経』の日藏分星宿品の一部に相当する*註4。このごく短い断片中に、幸いなことに、「佉盧虱吒仙人」と漢訳されている語に対応するものとして 'Kharuṣṭam riṣi' (Hoernle 1916: 123) という語が用いられている箇所が一箇所含まれている。つまり「佉盧虱吒」の原語が Kharuṣṭa であることが文献学的に保証されるのである。しかしながら、この断片自体、コータン語などの方言の混入が著しく、サンスクリットとして意味不明な箇所も多い*註5。従って、この Kharuṣṭa が元々のサンスクリットの語形ではなく、なんらかの方言により訛ったものという可能性も高い。

さて、この「カローシュティー」という名称の問題に関する従来の研究を最も詳細に検討したものに Falk (1993: 84-92) が挙げられる。彼の研究を参照しつつ、これまで研究者たちに考えられてきた主要な学説を要約して列挙するならば、以下のようになる。

- ・カルデア人天文学者 Xarustr (Wassilijew 1869)
- ・インド占星術師 Krauštuki (Weber 1869)
- ・ゾロアスター教開祖 Zarathustra ("T. Choutzé" (Gabriel Devéria) 1882, Cunningham 1891 他)
- ・アケメネス朝ペルシア初代国王 Kyros II (Terrien de La Couperie 1886/87, Bühler 1892 他)
- ・インドの北西部にある地名 Kalystrioi (カシュガル地方か) (Lévi 1901)
- ・「帝国」を意味するペルシア語 Khshthra + osta (Jayaswal 1920)
- ・北西部の都市を守護する夜叉 Kharaposta (Przyluski 1930)
- ・「彫る」を意味するアラム語の派生形 kharottha (=英語の character) (Diringer 1968)
- ・「書くこと」を意味するセム語系の言葉、例えばヘブライ語の Kharosheth (Chatterji 1952)
- ・シマウマのような雑種動物のこと (Dave 1966)
- ・マトゥラー周辺のある地域の統治者 (Humbach 1968)
- ・「統治」と「書くこと」を意味するイランの言葉のプラークリット化 (Bailey 1978)
- ・「帝国のために置かれた人、もの」を意味する中部イランの言葉の派生形 (Mukherjee 1981)
- ・「帝国の場所」「帝国の惑星観測者」もしくは「帝国の文書」を意味するアケメネス朝の言葉 (Bailey 1985)
- ・「祖国の本」を意味するコータン・サカ語の派生形 kshera + osta (Pathak 1986)

まずは、一世紀以上にも渡る研究の中で、様々な学説が唱えられてきたことに改めて驚かされよう。ただ、上記の列挙から、従来研究の大きな流れが漠然とながら理解される。まず、研究の黎明期には、佉盧虱吒仙人を、ゾロアスターやキュロスなど特に歴史的に著名な人物に関連させる傾向性が強く見られる。それが徐々に、何らかの地名と関係するのではないかと考えられるようになる。それ以降の傾向は大きく二つに分かれる。一つは、あまり知られていない地方の権力者や守護神を語源とする流れと、もう一つは、中央アジアや西アジアの言葉のサンスクリット語化であると理解する流れである。

いずれの学説にも一長一短があり、明確なことは何一つ言えない。そのため、現在に至るまで、様々な解釈が提起され続けており、決定的な研究がなされているとは言えないが、今のところ、「佉盧虱吒」とは、語源の明らかではない外来語がサンスクリット語化したものであると考えるのが無難と言えよう。

3. 佉盧虱吒仙人の伝説

以上見てきたように、「佉盧虱吒」という名前の由来は未解明のままである。しかし、漢訳経

典を見てみると、明確な形で、この「佉盧虱吒」は「驢唇」と言い換えられている場合が多く、例えば『大集經』日藏分や日密分のように、何故そのように「驢唇」と呼ばれるようになったかという出生譚まで詳しく説かれている。以下では、『大集經』に見られる記述を元に、「佉盧虱吒」なる人物がいかなるものとして描かれているのかを見ていく。

3.1 『大集經』に見られる佉盧虱吒仙人の出生譚

『大集經』「日藏分」は全十三品からなるが、その仏現神通品第七は、衆生に十方諸仏の世界を見せるため、世尊が娑婆世界のすべてを神通力によって自身の身中に収納するという内容である。続く星宿品第八では、娑婆世界全体が仏の身中にあり、魔軍の力が失われるのを見て、魔王が煩悶する様子が語られる。怒った魔王が、竜王たちに命じて世尊を攻撃させようとするも、その竜王たちも神通力を失い、光味仙人に救済を求める。光味仙人は、星辰と時節が適切な関係がないから、今は救済は難しい旨、竜王たちに告げるが、さらに竜王たちは「誰がそのように星宿の法を定めたのか」と問う。その答えの中で、光味仙人は佉盧虱吒仙人の出生譚を語りだす。その内容は以下の通りである。

『大集經』「日藏分」星宿品第八之一（大正397.13.274a27-274b20）：

大王。過去世時。此賢劫初有一大城名曰瞻波。彼中人民和合熾盛。有一天子名大三摩多。端正少雙才智聰明正法行化。常樂寂靜不著世榮。爲諸人民之所宗仰。恭敬禮拜而侍衛之。彼三摩多。清淨慈悲愍念衆生猶如赤子。不樂愛染常自潔身。王有夫人多貪色欲。王既不幸無處遂心。曾於一時遊戲園苑。獨在林下止息自娛。見驢合群根相出現。愆心發動脫衣就之。驢見即交遂成胎藏。月滿生子頭耳口眼悉皆似驢。唯身類人而復麤澁。驥毛被體與畜無殊。夫人見之心驚怖畏。即便委棄投於屏中。以福力故處空不墜。時有羅刹婦名曰驢神。見兒不汚念言福子。遂於空中接取洗持。將往雪山乳哺畜養。猶如己子等無有異。及至長成教服仙藥。與天童子日夜共遊。復有大天亦來愛護此兒。飲食甘果藥草身體轉異。福德莊嚴大光照耀。如是天衆同共稱美。號爲佉盧虱吒（隋言驢唇）大仙聖人。以是因緣彼雪山中并及餘處。悉皆化生種種好華。種種好果。種種好藥。種種好香。種種清流。種種和鳥。在所行住並皆豐盈。以此藥果資益因緣。其餘形容麤相悉轉身體端正。唯唇似驢。是故名爲驢唇仙人。

「大王よ、過去世時、この賢劫のはじめ、^{せんば}瞻波という名のひとつの大城があり、その中で人民は仲良く暮らし、非常に榮えていた。一人の天子がいて、名を大三摩多と言った。比類なく端正で、才智に優れ、正法を行化し、常に寂靜を楽しみ、世の榮華に執着せず、諸々の人民の尊敬の対象、恭敬礼拝の対象、侍衛の対象となっていた。かの三摩多は、清淨なる慈悲により衆生に憐れみを持つのは、まさしく赤子に対するごとくであり、愛欲にとられることをよしとせず、常に自ら身を潔く保っていた。王には夫人がいて、多くの色欲を貪っていたが、王はすでに寵愛することなく、心を遂げるところがなかった。

ある時、[夫人は]園苑で遊戲して、独りで林の下におり、休息して自ら楽しんでいた。

ロバが群れ合って根相（性器）が出現するのを見て、欲情がわき上がり、衣を脱いでこれに近付いた。ロバは〔それを〕見て、すぐに交わり、遂には懐妊してしまった。月が満ちて子を生むと、頭・耳・口・眼、ことごとくみなロバに似ていた。ただ身体のみ人に類似しており、しかもまた肌が粗く、たてがみが体を被い、動物と違いがなかった。夫人はこれを見て、心から驚き、恐怖して、即座に遺棄して屏中に投じた。〔しかし、赤子の〕福力のため、空中にとどまって墜ちなかった。

その時、羅刹の女がいて、名を驢神と言った。赤子の汚れなき様子を見て、福なる子であると念言して、遂には空中で受け取り、きれいにしてやった。雪山に連れて行き、乳を飲ませ、養育すること、我が子のごとく、平等であって、違いがあることがなかった。成長するにおよんで、仙薬を服用させ、天の童子と日夜共に遊ばせた。また、大天がいて、この子を愛護し、甘い果実や薬草を飲食させていたが、身体が変わってきて、福德により荘嚴され、大いなる光が照り輝くようになってくると、天衆は同じく共に褒め称え、号して佉盧虱吒(隋に驢唇と言う)大仙聖人となした。

このような因縁をもって、かの雪山の中や、さらにはそれ以外の場所に、様々な好華、様々な好果、様々な好草、様々な好香、様々な清流、様々な和鳥、ことごとくみな化生し、行住するところにあって、すべてが皆、豊かに満ちていた。この薬果に資益されたことによって、その姿形の醜いさまがことごとく転じて、身体端正となったが、ただ唇だけがロバに似たままであった。それゆえ、名付けて驢唇仙人となった。〕

佉盧虱吒仙人は、ロバと交わった王妃から半人半獣の姿で生まれ、母親からはすぐに捨てられるが、すでに不思議な力を持っており、驢神と呼ばれる羅刹女に拾われ、雪山で過ごす。この羅刹女の仙薬や天の人々と過ごし、天の食物を飲食するうちに、端正な姿に変わっていくが、唇だけが元のロバに似たままの状態であった。そのため、「驢唇仙人」と呼ばれるようになったとされている。

なお、「日藏分」の抄訳とされる「日密分」にも、かなり簡略化されたかたちではあるが、パラレルな箇所を確認することができる*註6。主な相違点は、(1) ロバと交わるという部分が欠けていること、(2) 夫人が子を投げ捨てる場所が「屏」ではなく、「厠」になっていることの二点である。

いずれにせよ、上記『大集経』の記述は、「佉盧虱吒」を、khara (ロバ) の oṣṭha (唇) を持つ仙人として、語源的な意味から「驢唇」と扱っている点で注目に価する。勿論、創作上の物語に違いがないが、このような物語が作られている以上、少なくとも、「佉盧虱吒」(先述の通り、サンスクリット断片に従えば Kharuṣṭa) という語に「ロバの唇」というニュアンスを『大集経』編纂者の誰かが感じ取ったことは明らかである。

3.2 星宿の法を定める佉盧虱吒仙人

さて、『大集經』中で、この驢唇仙人が星宿の法を定めたと言われるわけであるが、光味仙人は、そこに至るまでの経緯を次のように説明する。

『大集經』「日藏分」星宿品第八之一（大正397.13.274b21-274c9）：

是驢仙人學於聖法。經六萬年翹於一脚。日夜不下無有倦心。天見大仙如是苦行。時諸梵衆及帝釋天。并餘上方欲色界等。和合悉來禮拜供養。乃至龍衆修羅夜叉一切雲集。所有仙聖修行人。皆來到此驢聖人邊。種種供奉讚歎稱揚。如是苦行生來未覩。設供養已合掌問言。大仙聖人欲求何等。唯願爲我諸天說之。若我力能即當相與終不憒惜。爾時驢唇聞是語已。內心慶幸答諸天言。必能稱我情所求者今當略說。我念宿命。過去劫時見虛空中有諸列宿日月五星。晝夜運行各守常度。爲於天下而作照明。我欲了知分別識解。愍暗冥故不憚劬勞。此賢劫初無如是事。汝等一切諸天龍神憐我故來。願說星辰日月法用。猶如過去置立安施。造作便宜善惡好醜。如我所願具足說之。一切天言。大德仙人。此事甚深非我境界。若爲憐愍一切衆生。如過去時願速自說*註7。

「この驢仙人は聖法を学び、六万年を経て、片方の足をあげ、日夜下ろさず、倦む心があることがなかった。天は大仙のそのような苦行を見た。時には、諸々の梵衆および帝釋天、ならびにそれ以外の上方の欲界・色界の諸天らが一緒になってことごとくやって来て、[彼を] 礼拝供養した。乃至、龍衆・修羅・夜叉などの一切が雲集し、あらゆる聖仙・梵行を修める人たちが皆やってきて、この驢聖人の側に到り、様々に供奉して、讚嘆稱揚した。『このような苦行は生まれてこのかた見たことがない』と。

供養を設け終わって合掌し、[諸天は] 質問して [次のように] 言った。

『大仙聖人はいかなるものを求めようと欲していられるのですか。ただ願わくば、私と諸天のためにこのことを説いてください。もしも私の力で可能であるならば、すぐにまさに相与えて、絶対に物惜みいたしません』と。

その時、驢唇、このことばを聞き終わり、心の中で幸いを喜び、諸天に答えて [次のように] 言った。

『かならず私の心の求めるものをかなえることができるならば、今まさに略説します。私が宿命を念じたところ、過去劫時に虚空中に諸々の列宿・日・月・五星があり、昼夜運行して、各々が常度を守り、天下のために照明をなしているのを見ました。私ははっきり理解して、分別して識解したいと欲しています。[衆生の] 暗冥を憐れに思うので、苦勞は厭いません。この賢劫のはじめには、このようなことはありませんでした。あなた方、一切の諸天・龍神は私を憐れんで来てくれました。願わくば、星辰・日・月の法用を説いてください。過去に造作・便宜・善惡・好醜を置立して安施したごとくに。(以下省略)』

大人になった驢唇仙人は、六万年もの間、片足だけで立ち続けるという壮絶な苦行を開始する。

その姿を見て、天を含め、様々な人々が集まってくる。そして、何の目的でそのような苦行を行っているか、驢唇仙人に尋ねる。その答えとして、彼は、神通力を使って遙か昔の様子を見たところ、日月・星辰が規則正しく運行しており、今の世でもそのように星々を配置したいと願っている旨を告げる。そして、過去いかなるかたちで星々が配置されていたのかを諸天に確認しながら、彼は星宿の法を定める作業にとりかかる。

その後、驢唇仙人は星宿や暦などを次々と定めていくが、言うまでもなく、このことは、彼のモデルが何かしら天文学、占星術に造詣が深い人物であったことを意味している。

3.3 ブツダの過去世の姿としての佉盧虱吒仙人

さて、驢唇仙人が何故そのような姿で生まれてきたのか、その生い立ちに関わる逸話についてはすでに先に見た。しかし、何故、そのように生まれたのか。光味仙人は別の箇所ですべて述べている。

『大集経』「日藏分」星宿品第八之二（大正397.13.276a6-9）：

是佉盧虱吒仙人。於過去世亦造惡業。罪因緣故。雖得人身半爲驢狀。以有慈力其罪除滅。更得最好端正之身猶如帝釋*註8。

「この佉盧虱吒仙人は、過去世において、また悪業をもつくり、罪の因縁のゆえに、人身を得て、半分ロバの状態をなしていたけれども、慈力があったことにより、その罪が除滅され、さらにその上、帝釈天のごとき最好端正なる身体を得たのである。」

上記箇所では、驢唇仙人が過去世において悪業をつくったことが原因であると明言されている。しかし、ここでは、それだけではなく、異形であった驢唇仙人が、功德を重ね、端正な姿を得たということが強調されている。続く箇所では、この言葉を聞き、諸天らがみな歓喜する様子が描かれる。魔王の手下である竜王たちのような、悪を重ねる異形のものたちにとって、この言葉がより一層、特別な意味を持つのは当然である。

さらに光味仙人は、竜王たちの心を三宝に向かわせるために、次のようにも述べている。

『大集経』「日藏分」送使品第九（大正397.13.283a25-b12）：

時光味菩薩作是思惟。云何當令彼諸龍等。於三寶中迴心歸向。即以方便善巧音辭。次第教言一切龍王。一切龍王。信於我者。我實不能拔濟於汝。今有大聖一切智人。乃能施汝安隱無畏。我所讚歎。佉盧虱吒仙人功德如是。說法非我小德辦於斯事。彼聖人者。過去無量阿僧祇劫。已曾修習種種福德。一切難事皆悉能捨。所謂象馬種種寶車。妻子國城金銀輦輿。奴婢衣裳床榻敷具。衆生須者稱意與之。或復手足耳鼻舌身。頭目筋骨皮肉肌膚求無憍惜。速能滿足六波羅蜜。具大慈悲於苦惱衆生能令解脫。爲諸衆生得安隱故。乃至處於地獄之中。救濟衆生心無暫捨。亦不自爲得成佛道。欲令一切惡趣衆生得脫種種老病死苦。是大仙人。乃往過去無邊劫

中。經歷是等種種願行。而是仙人。生生世世堅固精進勇猛慈悲。引接衆生安涅槃道*註9。

「この時、光味菩薩は、次のように思惟した。『いかにしてまさにかの諸龍等を三宝の中に廻心帰向させることができるだろうか』と。すなわち、方便善巧の音辞をもって、順を追って一切の龍王に教えて言った。

『一切の龍王よ。私を信じて、私は実にあなた方を救済することはできない。いま、一切智を備えた非常に優れた聖者がいる。すなわち、あなた方に安穩無畏を施すことができるだろう。私が讚嘆するところの佉羅虱吒仙人の功德はかくのごとくである。法を説いても、私のような小徳の者がこのことについて話すようではない。

かの聖人は、過去無量阿僧祇劫、かつてすでに様々な福德を修習し、一切の難事をみなことごとく捨て去ることができた。いわゆる、象・馬・様々な宝の車、妻子・国城・金銀・みこし、召使・衣裳・寝台・敷具、衆生が必要とするならば、望む通りにこれらを与えた。あるいはまた、手足・耳鼻・舌身・頭目・筋骨・皮肉・肌膚を求められても、物惜みすることがなかった。速やかによく六波羅蜜を満足し、大慈悲をそなえ、苦悩する衆生が解脱できるようにさせた。諸々の衆生が安穩を得るために、乃至、地獄の中に身を置き、衆生を救済して、その心を片時も捨てることがなかった。また、[それは] 自分自身の仏道の成就を得るためではなく、一切の悪い境遇にある衆生が様々な老・病・死の苦しみから脱することを得るよう欲してであった。この大仙人は、乃往過去無邊劫の間、これらの様々な願行（誓願とそのための修行）を経験してきた。しかもこの仙人は、生生世世、精進を堅固にして、慈悲に勇猛であり、衆生を引接して、涅槃の道に据えてきた。』

この光味仙人の言葉の中で、驢唇仙人が果てしなく続く輪廻の中で、いかにして功德を積んできたかが語られている。ここで注目すべきは、ブツダの前生物語「ジャータカ」の中の著名な物語、すなわち、ヴェッサンタラ太子やシビ王の物語に匹敵するような菩薩の壮絶な利他行を驢唇仙人が行ったことになっている点である。

さらに光味仙人は続けて言う。

『大集経』「日藏分」送使品第九（大正397. 13. 283b12-18）：

又彼佉羅虱吒仙人。無量劫來種種福德具足圓滿乃至生於淨飯王家。託在摩耶夫人腹内。既出生已舉手唱言。我三界中最尊最勝。放種種光能與一切衆生安樂。光因縁故感動無量天龍夜叉及阿修羅人非人等。一切悉來而共供養*註10。

「またかの佉羅虱吒仙人、無量劫よりこのかた、様々な福德を具足圓滿して、乃至、淨飯王家に生まれ、摩耶夫人の腹内に託在し、すでに出生し終わって、手を挙げて唱えて言った。

『私は三界の中で最尊最勝である』と。種々の光を放ち、一切の衆生によく安樂を与えた。光の因縁の故に、数え切れない天・龍・夜叉、および阿修羅・人非人を感動させ、一切ことごとくやって来て、一緒になって供養した。（以下省略）」

上記引用から明らかなように、『大集経』の中では、最終的に、驢唇仙人は、長い修行の境涯を経て、ゴータマ・シッダールタとしてこの世に生まれ変わったということにされている。これに対して、文脈上、光味仙人が竜王たちの心を三宝に向かわせるために用いた単なる方便であるという解釈も可能である。事実、先に引用した箇所（下線部）に「方便善巧の音辞をもって」という記述もある。しかし、今は、驢唇仙人をブツダの過去世の姿のひとつとみなす興味深い解釈が『大集経』の中にあるという事実のみを指摘するに留めておく。

なお、『大集経』では、この後、竜王たちは光味仙人の勧めに従って、ことごとく三宝に帰依し、竜王たちを遣わした魔王はさらに激怒することとなり、話が進んで行く。

4. まとめ

以上の検討を通じて、明らかになったことをまとめると次のようになる。

(1) 「佉盧虱吒」という漢訳は人物名と文字名の両方を意味し得る。人物名としての同語の原語は、Kharuṣṭa という形であり、文献的な根拠を持つ。しかし、それは方言として訛っている可能性も高い。

(2) 「カローシュティー」という名称について、一世紀以上に渡り、研究者たちが様々な説を披露したが、現在のところ、語源のはっきりしない外来語がサンスクリット語化したものであるとする説が有力である。

(3) 『大集経』では、「佉盧虱吒」が「驢唇」と理解され、それにまつわる出生譚が詳しく語られる。その中で、佉盧虱吒仙人は、過去の悪業の報いで、ロバと王妃の間の子として半人半獣の身に生まれるも、羅刹女に育てられ、諸天とともに過ごすうち、唇を除く部分の容姿は極めて端正となり、そのため、「驢唇」と呼ばれると記述される。

(4) さらに『大集経』では、佉盧虱吒仙人は、壮絶な苦行者として、天体・暦の設置者、利他行を行う菩薩としてそれぞれ描かれ、最終的には、ブツダ本人（の前生）として描かれている。

なお、本研究では、『大集経』の「日蔵分」と「日密分」のパラレルを比較検討してみたが、「日蔵分」の抄訳とされる「日密分」には、佉盧虱吒仙人をブツダ本人に結びつける部分など、文脈の流れからすれば、かなり重要と思われる箇所が全く欠落している。そのため、訳者不詳とされる「日密分」の方が古く、「日蔵分」はそれに話を盛り込んでいるという印象を受けたことを最後に付言しておく。この「日蔵分」と「日密分」の成立順序の問題については、今後の課題としたい。

註

1) 善波1957、幡谷1989等を参照されたい。

2) 7世紀後半に編纂された百科事典的性格を持つ『法苑珠林』（大正2122. 53. 351b29-351c3）にも同じ

記述が見られる。ただし、『法苑珠林』では、『出三蔵記集』の「佉樓」に対して「佉盧」という漢字が用いられている。

- 3) Salomon 1998: 50を参照されたい。
- 4) 栗山他2018において筆者は、親鸞の『教行信証』「化身土巻末」に引用される『大集経』「日蔵分」に相当するサンスクリット断片を同定しており、その漢訳、チベット語訳の対応を指摘した。山田 1959: 100等も参照されたい。
- 5) See Hoernle 121-122: “As will be seen, the ‘mixed dialect’ is here very corrupt, and in some plaes the meaning is obscure.”
- 6) 『大集経』「日密分」分別品第四之二（大正397. 13. 230c14-27）：大王。先過去世賢劫之初。旃陀延城。其城有王名無量淨。正法治國。不貪欲樂常樂寂靜才智聰達。王有夫人。欲心發動與王遊行。在一林中貪心視王。即便妊身。是時夫人時滿即生其兒。頭耳項眼脣口悉皆似驢。餘分似人。其母見已即生怖畏。擲之廁中身未至地。是時驢鬼於空接取。往雪山之中。瞻看哺養猶如生子。時雪山之中有甘美藥。驢鬼採取以食是兒。是兒食已身則轉異。有大光明福相具足智慧慈悲。以是因縁。諸天禮拜供養讚歎。爲是兒故。於雪山中有諸種種藥草果蔴。餘相悉轉唯脣似驢。是故名爲驢脣仙人。
- 7) この箇所に対応する「日密分」のパラレルは以下の通りである。『大集経』「日密分」分別品第四之二（大正397. 13. 230c27-231a3）：於六萬年受持禁戒常翹一足。一切梵天魔天帝釋。大設供養而供養之。皆悉合掌。白驢脣仙人。欲求何願唯願語之。若我力能我當施汝。仙人答言。我今欲得了知星宿。爲衆人故心生憐愍。
- 8) 「日密分」に対応箇所なし。
- 9) 「日密分」に対応箇所なし。
- 10) 「日密分」に対応箇所なし。

参考文献

- Bailey, Harold W. (1978) “Two Kharoṣṭhī casket inscriptions from Avaca.” *Journal of the Royal Asiatic Society* 3-13.
- Bailey, Harold W. (1985) *Indo-Scythian Studies (being Khotanese Texts Vol. VII)*. Cambridge: Cambridge University Press. 46-49.
- Bühler, J. G. (1892) “A New Variety of the Southern Maurya Alphabet.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 6: 148-156.
- Choutzé, T. (Devéria, Gabriel) (1882) “Questions.” *Revue de l’Extreme Orient* 1: 158f.
- Cunningham, Alexander (1891) “Coins of Indian Buddhist Satraps, with Greek inscriptions.” *Journal of Asiatic Society of Bengal* 23: 679-714.
- Dani, Ahmad Hasan (1963) *Indian Palaeography*. Oxford: Clarendon Press.
- Dave, S.S. (1966) “The meaning of „Kharoṣṭhī.“” *śāradā piṭha pradīpa* 6(1): 28-32.

- Diringer, David (1968) *The Alphabet. A key to the history of mankind*. London: Hutchinson. (3rd ed.)
- Falk, Harry (1993) *Schrift im alten Indien*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Hoernle, A. F. Rudolf (1916) *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*. Vol. I. Oxford: Clarendon Press.
- Humbach, H. (1968) "(Book Review) A.H. Dani: Indian Palaeography." *Orientalistische Literaturzeitung* 489-491.
- Jayaswal, K.P. (1920) "The Statue of Ajatasatru Kunika and a Discussion on the Origin of Brahmi." *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 6: 173-204.
- Lévi, Sylvain (1901) "Note sur l'origine du nom de l'écriture dite kharoshthi." *Journal Asiatique* 9e série, 18, 502.
- Mukherjee, B.N. (1981) "A Note on the Name Kharoshthi." *Journal of the Asiatic Society* 4. Ser. 23: 144-146.
- Pathak, Vishwambhar Saran (1986) "Presidential Address." *Journal of the Epigraphical Society of India* 13: 1-10.
- Przyluski, Jean (1930) "Le nom de l'écriture kharosthi." *Journal of the Royal Asiatic Society* 43-45.
- Przyluski, Jean (1931) "The Name of the Kharosthi Script." *Indian Antiquary* 60: 150f.
- Salomon, Richard (1998) *Indian Epigraphy*. New York: Oxford University Press.
- Terrien de La Couperie, (Albert Étienne) (1886/87) "Did Cyrus Introduce Writing into India?" *Babylonian and Oriental Record* 1: 58-64.
- Wassiljew, W. (1860) *Der Buddhismus, seine Dogmen, Geschichte und Literatur*. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften.
- Weber, Albrecht (1869) "(Book Review) Tāranāthae de doctrinae buddhicae. Ed. Antonius Schiefner." *Lit-erarisches Centralblatt für Deutschland* 1494-1497.
- 栗山俊之・宇治和貴・宇野智行・小山一行・金見倫吾・川尻洋平・楠本信道・小林久泰・中川正法・真名子晃征・毛利俊英 (2018) 『仏教と親鸞の宇宙観—『教行信証』化身土卷末の研究 (二)』(人間文化研究所モノグラフシリーズ 1) 筑紫女学園大学人間文化研究所
- 善波周 (1957) 「大集経の天文記事—その成立問題に関連して—」『日本仏教学会年報』22 : 101-116.
- 羽溪了諦 (1971) 「『大集経』と佉羅帝との関係」『羽溪了諦博士米寿祝賀記念 仏教論説選集』大東出版社 680-695.
- 幡谷明 (1989) 「浄土教と大集経」『親鸞教学』53 : 1 -29.
- 山田龍城 (1959) 『梵語仏典の諸文献 大乘仏教成立論序説 資料編』平楽寺書店

(本研究は、平成24年度教学研究資金助成による研究成果の一部である。)

(こばやし ひさやす : 英語学科 准教授)

『大集経』に見られるかるしつた佉盧虱吒仙人の伝説

小林久泰

A Sage Named Kharuṣṭa Found in the *Mahāsaṃniṣātasūtra*

Hisayasu KOBAYASHI

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第29号
2018年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 29
2018